
香る森で捕まえて

Rukevoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香る森で捕まえて

【Nコード】

N5685T

【作者名】

Rukv oi

【あらすじ】

只今就職活動中の晴香。

満員電車で寝ていたはずが…？

何故か森の中に。しかもかなり深い森で危険な香りが致します。

スーツでいきなりサバイバル！？

と思いきや、人発見！

相棒はスーツ（前書き）

よろしくお願いします。

相棒はスーツ

電車に揺られ、ふと、今関東大地震が起きたら生き埋めかなと考えた。が、次の瞬間、その考えを頭から出して、今考えるべき事を考える。

考えてもしようがないのだ、いつ起こるかも分からないことは。それより今日の前にある問題：

そう、まだ就職先が決まっていないこの問題の方が考える最優先事項だ。

優先事項の…。過去の面接を思い出しては、人前も憚らずに、アー？と言いたくなる。

第一志望だった企業で、どうしても入社したかった所が私にはあった。だが、それが反対にプレッシャーになり、面接では、自己PRも考えてきた事が真っ白になり、いきなり聞かれてもいない趣味を話し始め、挙句、面接官に氣を使われてしまった。そして氣を使ってくれたその優しさに触れて入りたい気持ちが高まったが、すでに遅く、不合格通知が着た時の落ち込みようは、凄かった：らしい。

b y母談。

最近良い事無い…。

就職活動してから？

良い事って言ったら、将来と過去の事を考えるようになったこと。今まで自由に欲望のまま生きていたから、振り返ることも無かった。将来にしたって、このままの生活が良いと思っていたが、その生活

は、父が支えているという事を今更ながら思い、働かなくては駄目だと至った。

そもそも人生をどう生きてきたのか考えた事無かったし、どう生きたいのかも分からない。

私はそんな事を考えながら、多くの人が乗っている車内を見回す。凄いい混みようだ。近くにお婆ちゃんが立っているが、この中に立つの嫌だし、何より、一枚しかないスーツが汗塗れになるのだけは避けたい。薄情だと思うが、ごめんなさいと思い、せめて寝たふりをしておこうと目をつぶる。

でも本当に眠かったのか、その後、すぐに意識が無くなった。

――

美術館行くのにちょっと外を出たら、この満員電車…押されながら立ち続けるのこの歳になると辛いわね。歳は取りたくないわ。と広告を読んでいた目を前に戻す。

あれ？

ふと、前の座席が空いている。

私の前に誰か座ってなかったかしら？

スーツを着ていて、いかにも就職活動で疲れてますって丸出しの女の子。就職氷河期に大変だなと思ってたのよ。

もしかして譲ってくれたのかしら？自分も疲れているはずなのに、前に私のようなお婆さんが来たら譲らなきゃと思うものよね。悪い

ことしたわ。

でも折角だから、座らせて貰おう。

そして彼女の意識は、今日の夕飯の献立へと向かう。

電車の中に乗っている誰もが、スーツの女の子の事を覚えている人はいなかった。それぞれが自分の事に精一杯だった。

スーツ汚れるよ。

電車内っていい感じの揺れでついても寝ちゃう。外国人が日本の電車に乗って驚く事って、座席に座った途端皆が一斉に携帯をするその依存性と無防備に寝てしまう危機感の無さって言うよね。まあ、日本の治安が良いという意味ではいい事だと私は思うけどね！

平和ボケだの言われたって疲れたんだから、しょうがない！ちゃんとバックは抱いて寝てるし！

この揺れと会話の無い車内に、
レールを走っている音に、
いい感じに当たる風に、
気持ちいいイスのクッションに…。

いや、硬くないか？イス？

というか、揺れ感じないし？

レールの音無いし？

風は当たってるけど、少し寒いよ。
温度上げなよ！エコじゃないよ！

ん？…なんかおかしくないか？

そろっと目を開けてみる。

最初に目に入ったのは、背の高い木々に守られるように、ぽっかり

と空いた空間に花畑がある光景だった。

日の柔らかい光がその花々だけに優しく当たり、それが小さな秘密の場所に來たような気持ちになる。

私は花畑の前に在る切り株に腰掛けて、そのすぐ後ろの木に寄りかかっていた。

冷んやりした空気が私の頬に当たる。

いやいやいや。

どう言う事だか誰か説明してくれまいか。

明日朝からテストセンターに行く予約したから、今日早く帰って勉強しようと思ったのに。

勉強しないと筆記で落ちてしまうよ！

待て落ちつけ自分。

あれ？就職活動とかその前に今私遭難してるのか？

どーして！？

立ってぐるぐると歩いてみる。

現実だ…。

あ。これ、エントリーシートのネタにならないかな？！人生の中で一番苦労した事はーって言われて、何故だか分からない場所に連れてかれて、そこから脱出しました！サバイバル能力有ります！とか

？ん？連れてかれたって今自分自身で言ったけど、そうかも。誰かに誘拐されて…でもここに放置？途中で魅力無いつてことに気付き、捨てた？…いやいや、失礼ですね。

一応、大和撫子美人と言われるのよ？

ストレートの黒髪に、白い肌で、日本人形みたい！着物着たらまさに、ホラー映画に出てきそう！って。あれ？最後褒めてなくないか？

スーツと男

突如、後ろに気配を感じた瞬間、背中を押されて地面が近くなる。

「ぶべっっ！！！」

（え。何々！？ 何事?!）

自分から発せられた乙女としてありえない声をスルーして背中の上にいる気配を感じ取る。誰かの温かい息が背中に当たり、ゾクツとした。その気配が殺気立っているのが分かる。

「あ…」何かを発しようとするが、すぐに顔を覆われそうな大きな手で、口を塞がれる。

（手…てことは、人間なんだ。大きい手だな。男の人？野蛮人？）

冷静に見えるが、まだ森の中に居たことすらまともに状況把握が出来ていない。ただ呆然と今起きていることを観察しているだけなのだ。

犬の唸りに似ている声が近くから聞こえる。

（森の中だから、狼かな。この人：私のこと守ろうとしてる？）

不安になり、少し動いてみる。
すると、

「ロリゼ。」

低い声のトーンで、背中の上に被さっている男がそう囁いた。ゾク
ツとするほど良い声を持つ男だ。思わず首が震える。

話すということは、野蛮人じゃない、意思疎通ができる存在ということに安心し、囁き返す。

「今聞き取れなかったんですが、何といいました？あの：助けてくださっているのですか？」

「……………?」

戸惑う雰囲気分かる。その間も、姿は見えないが、周りに狼だと思われる動物が唸っている。警戒しているようだ。今は襲ってくる感じはしないが、落ち着かない。

（え？もしかして日本語駄目？そんな深い森の中に入ってるの私？）

不安になり、無理して、首を捻ってその男を見る。

「…っ!？」

「……………!」

お互い初めて顔を見る。
どちらも衝撃を受けたようだ。

最初に目に入っしたのは、その赤い髪だ。サラサラと音が鳴りそうな赤い、角度によって紫も混ざっているように見える髪を胸あたりまで伸ばしている。

次に彼の彫りが深いスツとした顔。

そして赤い、ピンクと言っているほど鮮やかな透明感のある目を最後に見た。

彼も同じように見てたのか、目が合う。

（え！？不良！？…じゃなくて…日本人じゃない！！！！！！ここ外国？それとも、日本の森に迷い込んだ外国人？）

だが、そう考えている心の奥で、確信していた。

ここは、日本でも、外国でも、地球内でも無いということ。

スーツと男（後書き）

わかってたんです。

でも

だからこそ現実逃避したかった。

少し直しました。 6／17

スーツと血

ぼーっとしてなければ、所々にヒントは、あった。

放心しつつも、状況把握しようとしなない人は、考えてないか、誰かが助けてくれるという甘えがあるのだ。

・見たことの無い花、木。

・狼、と表現したが、こんな不思議な鳴き声するわけない。

・現れた彼の目のこんな鮮やかな赤は、カラコンでは出ない。

・ロリゼって何？あの状況で言うのは、大丈夫か、とか、動くな、とかだ。あと、外国語でそんな言葉知らない。

なにより。

・身体が浮きそうなくらい軽い。地面を踏みしめて歩かないと浮きそう。今強風が吹いたら、飛びそう。

私という存在が違和感すぎる。

まるで、全く違う空間に生きる生物を自然が追い出そうとしているようで…。

「キ アラレ ム？」

目の前にいる彼が話す。

(…わっかんない。あ、あなたは誰？とかかな？どっちにしても彼

の名前聞きたいから、自分から名乗ってみるか！)

自分自身を指差し、

「私は、晴香。」と言ってみた。

彼は少し怪訝な顔をして、何となく分かったのか、晴香を指差し、

「ワタシ…ハカ？」と答えた。

「えっと…ハルカ、ハルカ！」顔を指差し、分かりやすいように名前だけ言う。

すると彼は「ハルカ？…クイザラヌ。」と今度は己に指をさし、答えた。

「クイザラヌ！やっぱ外人っぽい名前！でも長いですね！名前女の子っぽいなーじゃああだ名は、クーちゃんね。」と名前が分かった嬉しさとクイザラヌが分からない言葉を話し続けたうえ、勝手にあだ名を着けた。

そんなことも知らないクイザラヌは、お互いの名前が分かった所で、今まで何も動きが無かった狼みたいな生物が動きだしたことに気が付き、構える。

「ロ リゼ」

(あ。また同じ言葉だ。)

晴香は、クイザラヌが晴香の肩をぐっと両手で押さえてそれを言っ

たので、動くなという意味だということだと理解した。

その瞬間、オオカミのような唸り声の生き物が森の中から顔を出す。

それは、確かに狼に似てはいたが、しいていえば、ゾンビになった犬という感じだった。晴香はよくゾンビ退治もののゲームをしていたので、ゾンビに見慣れてはいたが、現物に遭うと、腐ったような匂いやら、生温い温度を感じ取れ、又、唸り声がリアルなのだと言えながら、驚く。

晴香の驚きが恐怖に変わる前に、クイザラヌは、向ってきたゾンビ狼達の首元を手で切る仕草をする。

早くて何をどう動いているのか晴香には分からないが、ゾンビ狼達の死体がそこらじゅうに広がり、血の匂いに少し気分が悪くなる。

(す、すご。)

スプラッタゲームも遊ぶ晴香は、血には酔いはしたものの、視覚上は問題なく、狼もどきに対して恐怖や哀れみなどは感じなかった。

何よりまだ会ってから数分しかたっていないクイザラヌの雰囲気は晴香を、一緒にいれば大丈夫という気にさせるのだ。

周りにいたと思われる逃げたの以外の全てを倒し、クイザラヌはこちらを向いて突然手を差し出した。

晴香が条件反射で手を置くと、ぐっと握られ、手を引いて、スタスタと今ゾンビ狼の血で真っ赤になった花畑から周りの森に入る。

しばらく手を繋いだまま森を歩くと、

「シバ ドレ ロ コモ イ」とクイザラヌがぼそつと言った。

「なっ言ってるのかわからないです。」

「・・・・・・・・」

これが、クイザラヌと私との出会いだった。

スーツ：帰ってきたら、すぐ脱いでハンガーにかける！（前書き）

クイザラヌのターン

スーツ：帰ってきたら、すぐ脱いでハンガーにかける！

――――

振り向いた彼女は、神秘的な黒い目を大きくして俺を見つめた。

――――

朝に狩った獲物を持ちながら帰路につく。

ふと、濃い花の匂いがした。

（ああ、今日か。）

どんな生物でも惹かれるこの花の匂い。

この森にも一年に一回、花が咲く場所がある。

彼は、花が咲いている様子を見ようと花畑へと足を向ける。

花畑まで歩いて行くと、菌に侵されたワーヴルフが群れになり、花畑を囲っていた。

ワーヴルフは、前足を低くして一点を見つめている。

（狩りをしているな。）

彼の目が、その獲物へと向く。

黒い物体が、切り株の上に乗っているのが見えた。

よくよく近づいて見ると、黒い服を着ている人だということがわかる。

（狙われていることに気付いてないのか？）

黒い服に黒い髪をしている全身真っ黒な人物は、森の中でしかも、この”魂食いの花畑”にいる為か分からないが、何かが、違う気がした。

呑気にも花畑に見惚れているのか知らないが、ワーヴルフに獲物扱いされているのにもかかわらず、ぼけっと立っている。

ふと、身につけている黒と対照的に腕が真っ白なのに目があった。

あんなに白い肌を持つ人はあまり見たことがない。

（エルフか？ここからだと言は見えませんが…。：！）

一匹のワーヴルフの目が光る。

と同時に、クイザラヌは、足にぐっと力を入れて、その脚力で瞬時にその人物のもとに立ち、そのまま背中を押し、一緒にワーヴルフからの攻撃を避けるように伏せた。だが予想外にもその人物が軽く、想定より強く地面へ押し付けてしまった。

「ブベッツ！！」

何か面白い声が出たが、その声の高さからして女性ということが分

かった。

（しまった。鼻が折れてないといいが。）

彼女に飛びついてきたワーヴルフは、その勢いで、また森の中に飛び込み、再び隠れ、乱入してきた彼を警戒する。

八方からの気配に気を付けていると、彼女が声を出そうとしたので、口を覆った。そして、今度は、身体をもぞもぞと動かそうとしたので、動くなと言って彼女を静かにさせた。

（今あまりワーヴルフを刺激してはいけない。）

「@@@@@、@@@@?@@@@?」

一瞬何だこの音?と思うが、すぐに彼女が発した声だと気づき、意味が全く分からないことに身体が硬直する。

（何処かの辺境に住む民族か?）

そして、彼女も自分の言っていることが通じないとわかると、本格的にそわそわしだし、彼の方へ顔を向けようと首をひねる。

「……!!」

「…っ!」

———

白い細やかな肌。

黒い目。

赤く染まった唇。

思わず凝視してしまった。

その後、彼女の名は、ハルカということがわかった。

俺の名前がわかったあと、なにか嬉しそうに、分からない言葉を話していた。

俺に一生懸命に何か話しているハルカを見て、

何かが始まる音がした。

—
—
—
—

スーツ：帰ってきたら、すぐ脱いでハンガーにかける！（後書き）

誤字など発見しましたら、お手数ですが、コメントよろしくお願
いします？

お気に入りになってくださってありがとうございます（＊＾―＾＊）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685t/>

香る森で捕まえて

2011年6月25日13時16分発行